

一条校におけるアートを核にした 国際バカロレア教育 PYP カリキュラムの構築（2 年次）

代表者：鈴木光男 分担者：太田 雅子 二宮 貴之 モーテン・J・ヴァテン

【研究目的】本号は 2021 年度より国際バカロレア教員養成プログラム（IBEC）を開始し、クリストファーこども園・小学校も 2023 年度に国際バカロレア教育（以下 IB）認定校となった。今後、聖隷学園ならではのカリキュラム編成作業が進められる。日本の学習指導要領との整合性を図りながらクリストファー小学校・園ならではのプログラム開発・カリキュラム構築は目下の課題である。2023 年度に訪問が叶わなかったシンガポール IB 校や国内 IB 校を訪問し、年間指導計画やプログラム、結果として生まれた作品や表現の資料を提供いただきインタビュー調査を行うことで、アートを中核にどのようなプログラムやカリキュラム・学習環境が用意されているか確認した上で、2023 年度に訪問・調査した IB 校と比較・検討し IB プログラム開発・カリキュラム構築に役立てることが第一の目的である。そして、国内一条校におけるアートを核にした PYP（3 歳から 12 歳を対象とした Primary Years Programme）カリキュラムの構築へと繋げていくことを目的とするものである。

（1）本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

聖隷クリストファー大学では 2021 年度より国際バカロレア教員養成プログラム（IBEC）を開始し、クリストファーこども園・小・中・高校も国際バカロレア教育（以下 IB）認定校になるべく準備を進めている。先ずは先行的にこども園・クリストファー小学校に IB プログラムコーディネーターが置かれ、IB の授業運営を手掛けながら聖隷学園ならではのカリキュラム編成作業が進められている。日本の学習指導要領との整合性を図りながら、クリストファー小学校・園ならではのプログラム開発・カリキュラム構築は目下の課題である。

その中でアートは、世界的な STEM 教育（Science 科学、Technology 技術、Engineering 工学、Art 芸術、Mathematics 数学）の 5 つの単語の頭文字を組み合わせた教育概念）への関心の高まりに見られるように、教育実践上の中核をなすものである。また経済同友会は、伝授の均一性の高いこれまでの日本の教育から感性と創造性を培う多様性に満ちた教育への転換を求める提言を 2023 年 4 月に発表した。ここで求められる教育の転換は、正に探究を中心にしたものであり、IB やアートとの親和性は高いものである。

（2）本研究の目的および学術的独自性と創造性

日本国内における IB のアート領域に関する先行研究をレビューすると、その多くが MP であり、PP に関するものはごく僅かである。アート領域を美術、音楽、ダンス、演劇と捉えて先行研究を概観すると、美術、音楽に関するものがいくつかあり、ダンスや演劇に関するものはほとんど報告されていない。また、その多くが MP に関する文献調査であり、PP に関する実践に即した調査は不足している。

このような現状から、本研究は次のような点について調査することとする。

第一に、IB を先行的に行っている国内外の IB 校において現地視察とインタビュー調査を行うことで、子供たちがどのように学び、何を感じ、どう成長しているのか、についてプログラムやカリキュラムの特長と合わせて現状を明らかにする。

第二に、視察を通して得られたデータを基に一条校で展開可能なアート領域の IB プログラムを創出する。国内では理論と実践を結び付けた報告が皆無であるため、アート領域の発展に寄与する貴重なデータとなり得る。

第三に、国内外の PP を導入している学校を調べた上で一条校として展開可能な独自のアート領域（美術、音楽）に関するプログラムを創出し、実証的にクリストファーこども園、小学校の現場で実践し効果測定を行う。実践の分析については、観察法及びインタビューを通して得られたデータを質的、量的の両側面から捉え、これまで日本国内で報告されていない IB のアート領域の実践事例について明らかにする。

このように、国内、国外の教育プログラムをリサーチし、現地視察を行い、指導者らにインタビュー調査をすることから得られた知見を基に、IB 認定校となったクリストファーこども園・小学校において実践し効果検証するという一連の研究を通して、アート領域を核に据えた IB 教育の事例を日本国内から世界に発信する挑戦的な取り組みを行うことを目的とする。

2023 年度は IB を先行的に行っているシンガポールへの調査依頼をしたが、それが予定通り進められず、フィリピンの IB 校と国内 IB 校を訪問・調査するに止まった。そこで 2024 年度は本研究・調査を継続し、シンガポールをはじめ国内外の IB 校で年間指導計画やプログラム、結果として生まれた作品や表現の資料データを収集し、それらに関するインタビュー調査結果を踏まえて、アートを中核にどのようなプログラムやカリキュラム・学習環境が用意されているか 2023～2024 年度 2 年間で得られたデータを比較・分析する。そして、国内一条校でのプログラム開発・カリキュラム構築上の課題やポイントを整理したうえで、一条校におけるアートを核にした PYP（3 歳から 12 歳を対象とした Primary Years Programme）カリキュラムの構築へと繋げていくことを目的とするものである。

（3）本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

①調査方法

本調査では、各校の年間指導計画やプログラム、結果として生まれた作品や表現などの成果物を提供いただき、学習環境の観察と併せて IB プログラムコーディネーターを対象にインタビューガイドに沿った半構造化インタビュー調査を実施する。調査の焦点は以下の通りである。

1) PYP の Arts Scope and Sequence（範囲と順序）の枠組みの中で、学校の Programme Of Inquiry（探究プログラム、以下 POI）が具体的にどの位置付けられているか。

2) 国内外の IB 校で、アートを基にした Unit Of Inquiry（探究の単元、以下 UOI）の計画・指導・学習・評価・振り返りのプロセスや、関連する学習環境がどのようになっているか（授業参観はせず、学習環境の観察のみ）。

3) PP での、アートを不可欠な学習分野としてカリキュラムに組み込まれている。アートの関係するカリキュラムの中で、園児・児童は様々なアート（ダンス、音楽、美術など）を体験することが求められている。日本の学習指導要領と PYP の枠組みの中でのアートにおける探究の関連はどのように図られているか、そこでの課題は何か（国内 2 校に対して）。

②調査実施の期間

倫理審査の承認を得た後、2025 年 1 月～3 月を実施期間として訪問・インタビュー調査を行い、収集したデータを 2023 年度のデータと合わせて検討し、具体的なプログラムやカリキュラム、学習環境などのモデル案を 2025 年 7 月をめどにまとめるものとする。

③インタビュー内容と方法

今回の調査目的は、各校のアートを核とした IB プログラムやカリキュラムの運用状況を知ることである。インタビュー内容については 2023 年度調査時に使用したインタビューガイドをもとに実施する。インタビューは同意を得た上で録音し、逐語録を作成する。ただし、録音の同意が得られない場合は、メモを取ることに同意を得る。その後、定性的コーディングやカテゴリ化により活字データから理論化を試みる。

④IB プログラムやカリキュラム、学習環境などのモデル案の提示

本年度はデータ収集と分析、そしてそれらをもとにした IB プログラムやカリキュラム、学習環境などのモデル案の提示までを目標とする。最終的には 2026 年 3 月に論文あるいは調査報告としてまとめ、聖隷国際教育学会学会誌に投稿する。

■訪問視察調査

1. 日本国内 IB 一校（J-IB 校）

日 時：2025 年 3 月 4 日（火）9:00～12:00

内 容：プレ・エキシビジョンの観察と IB コーディネーターへのインタビュー

この調査対象とした J-IB 校には 2023 年度にも訪問をし、授業観察と IB コーディネーターへのインタビューを実施している（詳細は、聖隷クリストファー大学国際教育学部研究紀要 No.2（2024）に詳しい）。その際のインタビューにおいては、『探究プログラム』（POI: unit of inquiry）を先ずは構想し、そこにどう園児や音楽などのアートが入るところを作っていくか探っているといった返答があった。そのため、2025 年度からは音楽と体育に加えて図工においても専科教員を設けるとし、担任・IB コーディネーターと協働して POI を構想し始めるということであった。今回は、その成果が IB の総まとめと位置づけられる小学 4 年生のエキシビジョンで具体的なことと結果について観察することが主眼であった。

写真 1 は子供自身が義手について研究し、身近な材料で自作した義手である。将来は義手となるロボットアームを開発したいと語っていた。写真 2 は「じしんで命を守るための「ばうさくカルタ」である。写真 3 はプラスチックごみから海洋生物を守るため、プラスチック由来のゴミを減らすことを啓発するためのバットボールを使ったライオンである。写真 4 は汚れた水でもきれいにする濾過装置を自作し、実際に目の前で実験して見せているところである。

このように、図画工作科専科教員が加わることで、昨年度に増して自作の具体物を使って提案をする児童が多く見られようになっている。ただし、内容的にはまだ探究不足である点は否がなかった。例えば、マイクロプラスチックの問題を海洋生物への影響のみで捉えている発表が多く、人間の健康被害に直結した問題にまで深刻化しているところまで追求はなされていなかった。その他の問題も数年前までに言われていたデータや論議が多く見られた。この問題を克服するには、さらなる児童同士の批判的な対話や担当教員による資料や疑問の提供などが望まれる。近年の生成 AI の進歩はめざましいため、生成 AI を一人の対話相手として位置づけ、一人一人が考えたアイデアや思いを投げかけて AI との対話により深めていくことができるだろう。担当教員と児童同士の対話の不足を補う可能性がある。しかし、生成 AI からの提案や提示を鵜呑みにするのではなく、自身で検証したり、行動に移したりする過程がより大切になってくるだろう。

2. 日本国内 IB インターナショナルスクール（S-IB 校）

日 時：2025 年 3 月 14 日（金）9:00～15:00

内 容：プレ・エキシビジョンの観察と副校長・PYP コーディネーター・アート専科教員へのインタビュー

本調査は、S-IB 校における PYP カリキュラムの実践と芸術教育の統合に焦点を当て、授業観察および副校長・PYP コーディネーター・アート専科教員へのインタビューを通じて実施された。インタビューでは、芸術の統合のあり方、カリキュラムの構成、教師のマインドセットと協働体制、学習環境の影響、学習成果の評価、そして地域コミュニティとのつながりに注目した。中でも特に強調されたのが、演劇教育の重点的な取り組みである。S-IB 校では、芸術活動、特にステージプロダクションのなかで演劇的表現を通して、生徒の社会的・感情的な成長、リーダーシップ、対人スキルの育成を促している。たとえば、約 130 名の生徒が参加するステージプロダクションでは、異なる年齢の生徒が共通の目標に向かって協働することで、年齢を超えた学びの関係性が自然に育まれている。



写真 1 は、生徒によるステージレイアウトの提案。写真 2 および 3 は、PP エキシビジョンの準備の様子を捉えており、最終学年の生徒が自分にとって意味のある課題に取り組む姿が見られる。写真 4 には、生徒が探究ジャーナルに記した、概念的解読を深めるための問いが示されている。そして写真 5 は、「学習環境は第三の教師である」という理念に基づき、子どもたちの主体性を育む柔軟性をもった環境づくりの一例である。このように、S-IB 校では芸術を通して学びを深化させると同時に、生徒一人ひとりの主体的な成長とコミュニティとのつながりを大切に教育が実践されていることがうかがえる。

■成果と課題：

2023 年度の調査・研究では「一条校で IB 教育を実践するシステムや体制などの課題」が明確となった（聖隷クリストファー大学国際教育学部研究紀要 No.2）。その課題を克服するために、本調査対象校の J-IB 校では音楽科と体育科だけでなく専科教員に図画工作科の専科教員も加えて、学級担任・IB コーディネーターと協働して単元を構想するようにした。それが本年度のエキシビジョンの内容や進め方に反映され、できる限り具体物・造形物を思い思いに自由に製作し、発表時に示すことが大きな条件となっていた。このような J-IB 校の変化は大きな意味のあるものと捉えられた。しかし、教員個々の子供への対応を観察すると、児童と共に思考・対話的に関わる教員もいれば、制約的に児童に関わり発表の内容よりも表面的な児童の動きや・座り方を指導しコントロールしようとする教員の姿も確認された。

その後には訪問した S-IB 校での観察や聞き取りを通して、「指導者のマインドセットの必要性、教育環境の充実が及ぼすことへの影響」が課題として浮上した。右の表 1 は IB 教育を推進する上で必要となる探究型（創造型）授業と、従来の伝授・伝達型の授業における教師のマインドセットを比較したものである。また、図 1・2 は、教師のマインドセットの違いにより見られる学習を図示したものである。探究型、創造型の授業においては、教師と児童が学習のパートナーとして横並びで学習を進める。その中で、お互いに影響を及ぼし合う「双方向性（対話）」（佐伯胖『わかる』）ということの意味【新版】（1996 年）が重要となる。つまり、教師が全ての知識や情報を持っているのではなく、児童と同じく「分からない」を前提に共に学びを深め、探究していく同志となるものである。そのためにこそ、教師は「教える」という姿勢から、児童が今何を、何に取り組んでいるのかを「探る」姿勢に転換することが重要である。

一条校においては、IB 教育を導入し探究型で全人的な教育を志す上で、非常に基本的なことではあるが、こうした教師のマインドセットへの転換と共有が必要になるだろう。

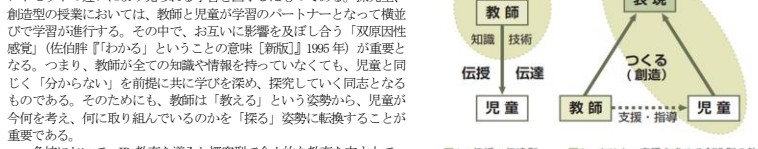


表 1 教師の授業類型別マインドセットの比較

特徴	探究型授業における教師のマインドセット	従来の伝授・伝達型授業における教師のマインドセット
役割	ファシリテーター、伴走者、問いかけ役	知識の伝達者、説明者、管理者
知識への姿勢	知識は児童が自ら探求し、構成するもの。教師は探究の道筋を支援する。	知識は教師から児童へ正しく伝えられるもの。教師は知識を整理して提供する。
問いへの姿勢	知識の疑問や興味・関心から生まれる問いを尊重し、探究の出发点とする。	教師が設定した学習目標や課題に対する答えを児童に教える。
評価の視点	思考プロセス、問題解決能力、協働性、自律性、探究の深さなどを重視。	知識の正確な理解度、記憶力、正解への到達度を重視。
児童との関係	対等な対話を重視し、児童の主体性を引き出す。	教師が主導権を握り、児童は指示に従って学習を進める。
目標	児童が自ら学び続ける力、問題を解決する力、クリティカルな思考力を育む。	特定の知識や技能を効率的に習得させる。
授業の進め方	児童の探究活動を中心に、柔軟に展開。	事前に定められたカリキュラムやシラバスに沿って、計画的に進行。

参考文献

- ・佐伯胖『わかる』ということの意味【新版】岩波書店、1996 年
- ・大橋功、新聞伸也、松岡安明、藤本洋三、佐藤賢司、鈴木光男、清田哲男『美術教育概論（新訂版）』日本文芸出版、2018 年
- ・モーテン・J・ヴァテン、鈴木光男、太田雅子、二宮貴之「一条校におけるアートを核にした国際バカロレア教育 PYP カリキュラムの構築」『聖隷クリストファー大学国際教育学部研究紀要』第 2 号、聖隷クリストファー大学国際教育学部、2024 年